

幕末・明治維新の静岡をめぐる旅

今年、第十五代将軍・徳川慶喜公が「大政奉還」を申し出た1867年（慶応3）から150周年にあたり、京都市を中心に記念プロジェクトが開催されています。

また、来年は西郷隆盛を主人公にしたNHK大河ドラマが放映されます。

そこで、今回の観光飲食部会特集では、静岡市の幕末・明治維新の史跡をめぐりつつ、幕末から明治維新への変わり目を取り越えた人々の生き様に想いをよせました。
（文責・企画広報室）



1 西郷・山岡会見の地

江戸に向け駿府に進軍した有栖川宮熾仁親王を大総督とする東征軍の参謀・西郷隆盛と、徳川幕府の軍事最高責任者・勝海舟の命を受けた幕臣・山岡鉄舟の会見が1868年（慶応4）3月9日、伝馬町の松崎屋源兵衛宅で行われました。

この会見において、第十五代将軍徳川慶喜公の処遇、江戸城の明け渡し、徳川幕府の軍艦・武器の引き渡しなどが合意され、5日後の3月14日、江戸・三田の薩摩藩邸で行われた勝海舟と西郷隆盛との会談により最終的に決定され、江戸城の無血開城が実現しました。

明治維新史の中でも特筆すべき会談に位置づけられます。



2 宝台院

徳川慶喜公は1868年（明治元）7月19日に水戸を出発して銚子港に到着し、21日に蟠龍丸に乗船し、23日に清水港に到着。厳重な護衛がついて駿府に向かい、夕刻には二代将軍秀忠公の生母ゆかりの宝台院に入りました。

翌年9月28日に謹慎が解け、10月5日に紺屋町の元代官屋敷に移転するまで約1年を宝台院の十畳の居間で起居し、六畳間で勝や渋沢と面会しました。

当時の宝台院の建物は焼失しましたが、慶喜公の遺品として、キセル、カミノリ箱、急須、火鉢、直筆の掛軸、居間に安置した観音像が残っています。静岡市葵区常磐町2-13-2。



徳川慶喜



1837（天保8）～1913（大正2）
水戸藩主・徳川斉昭の七男。1847年、一橋

家を継ぐ。1866年、第十五代将軍となる。翌年、大政を奉還して列侯会議の実権を握ろうとしたが、武力討幕に追いこまれ、大坂に退去。海路、江戸に帰った。この間、鳥羽伏見の戦いが起こり、朝敵の汚名を受けたが、討幕軍の東下に際し、江戸城で謹慎して内乱の回避と徳川氏の存続に努め、江戸城を明け渡して水戸に去り、徳川家を譲った家達の駿府移住が決まると、慶喜も駿府へ。1897年（明治30）、東京へ移り、公爵となる。

徳川家達



1863（文久3）～1940（昭和15）
田安慶頼の第三子。1868年4月の江戸

城開城で、六歳になる田安亀之助が徳川宗家を相続した。次いで駿河・遠州両国で70万石が与えられ、駿河府中藩主として駿府に入り、重臣の協力を得て藩政の展開を図り、商法会所、静岡学問所、沼津兵学校等を開設、無縁移住した旧幕臣には牧之原等各地の開墾を奨励。1869年の版籍奉還により藩知事となり、駿府を静岡と改称。1871年の廃藩置県で東京に戻り、1877年に英国留學。1890年から帝国議会の貴族院議員となる。